

科目区分：芸術文化課程（音楽文化コース）

授業科目名：ピアノ④

対象年次：2年次

授業公開報告書

「ピアノ④」ー古典派ピアノソナタ作品を中心に

音楽教育講座 福富 彩子

1. 授業の目的

ピアノの演奏を通して、楽譜から様々な情報を読み取り、感じ、考え、表現するという道筋を学ぶ。その課程で、自らの演奏表現を開拓・実践する力を養うとともに、指導者としての基礎能力を育成することを目的とする。

2. 授業の概要（前学期）

1) 前学期の授業内容

古典派のピアノソナタや、ショパン、リストの練習曲を中心に取り上げて実践し、課題への実技レッスンを行う。具体的な演奏曲目については個々の学生と相談の上決定し、次の4つの柱を目標に学生の力をのばしていけるよう心がけている。

- ① 楽譜に記された情報から表現方法を選択することができる。
- ② フレーズや和声、楽曲構造を認識し、音楽を捉えることができる。
- ③ 演奏時の身体反応の意識化。
- ④ 自らの考えや意見を述べることができる。

2) 前学期に取り上げている演奏課題

- ① L.v. ベートーヴェン：ピアノソナタ第6番 Op. 10-2 へ長調
F. ショパン：練習曲より Op. 10-1
F. リスト：パガニーニ練習曲より 第5番
- ② L.v. ベートーヴェン：ピアノソナタ第19番 Op. 49-1 ト短調
F. ショパン：練習曲より Op. 25-2
- ③ L.v. ベートーヴェン：ピアノソナタ第9番 Op. 14-1 ホ長調

F. リスト：二つの演奏会用練習曲より「こびとの踊り」

F. ショパン：練習曲より Op. 10-4

(※下線の作品は、授業公開時に演奏)

3. 授業公開

1) 授業公開の概要

授業公開時には、ベートーヴェンのピアノソナタを中心に受講生2名の具体的な演奏表現についてのレッスンをを行った。同授業は、森山伸、木村勢津、田邊隆、井上洋一の諸先生の参観のもと実施された。

2) レッスン内容について

- ① 作品についての音楽的なイメージや楽曲構造の認識を深めるため、さらに、自分の意見を言葉で述べられるようになるため、学生に次のような質問を行った。
「この作品は（この部分は）どういうイメージで、どのように演奏したいですか」、「第2主題は、どこですか」、「フレーズや呼吸はどこまでですか」、「曲のクライマックスはどこであると思いますか」等々。
- ② 音楽の流れを体感してもらうため、受講生の演奏と共に歌いながらの指導、あるいは、授業者が演奏をして流れを感じてもらえるようレッスンをを行った。
- ③ 表現時の具体的なアプローチ方法を指導した。
- ④ 楽譜に記された情報を、その表現方法の在り方について学生と意見を交換しながら確認を行った。

⑤ 実際に演奏する際の鍵盤とのコンタクトや、和音を演奏する時の音のバランスなど、技術面においての指導を行った。

3) レッスン時の学生の反応

- ① 音楽イメージやフレーズに関する授業者の問いかけに対して、「森にいるようなイメージ」、「ここまで一つの呼吸でいきたい」等、どのように演奏したいかということについて受講生の積極的な応答があったが、ソナタ形式の第2主題が認識できていない点などは、今後、楽曲構造を理解する上での課題である。
- ② 授業者の指揮や歌、模擬演奏に反応して、受講生の演奏時の呼吸が深くなったが、その表現方法や技術面においての課題も同時に見えてきた。
- ③ 具体的なアプローチ方法を示すと、すぐに良い反応が返ってきた。
- ④ 楽譜の情報理解が不十分であり、随時、その確認作業をレッスン時に行わなければならない状態である。
- ⑤ 音のバランス、打鍵法といった音色に直結する技術面に関して、少ない時間の中で良い反応を得ることができなかった。

4) カンファレンスの内容

授業公開を参観した教員から次のような授業に関する感想や意見を得た。

①良かった点

- 無駄のない丁寧な内容の授業であった。
- 分野は違うが、指導観点やプロセスに関して参考になった。
- 楽曲分析や楽典などの内容にも及ぶレッスンであった。
- 授業者の模擬演奏がわかりやすかった。

②気づいた点や今後の課題

- 本時の授業では、演奏表現法の一つである「音色の作り方」や「ペダルの使用法」に関してほとんど触れられていなかったが、授業者の意図はどのようなものか。

↓

授業者：技術面での指導とその習得には大変な時間を要するため、現段階では楽

曲構造の認識に観点をおき、まず表現したい内容を受講生が感じ取ることにより主眼を置いている。しかし、指摘の通り、表現と技術は表裏一体であるので、今後、長い視野で取り組むべき課題であると強く感じている。

- 授業者の演奏時に、ペダルの使い方や身体の在り方を受講生が観察できていない。
- クラス授業の利点を生かして他の受講生に感想等を聞き、ディスカッションを行うことで、より充実した授業になるのではないか。
- 受講生が自身の演奏を客観的に見られるよう、録画等の映像を授業で活用してはどうか。成長の記録としても活用できる。(ただし、その頻度が高くなると、違った弊害が生じる可能性も考えられる。)
- 実技レッスンでは、音楽の専門用語や楽曲構造の理解に至る基礎知識が要求されるため、今後、音楽教室におけるカリキュラムの全体像と授業の関係を見直す必要性を感じた。

4. まとめ

実技のレッスンでは、楽曲研究による事前の授業準備を行っているが、個々の学生の演奏やその時の反応に応じて、様々な角度からのアプローチを選択し指導を行っていかねばならない。現段階では、指導方法の幅にも限界があるため、今後、さらに視野を広くしてアイデアを模索し、授業をより良いものにしていく必要があると感じている。授業公開後のカンファレンスの中で、「音色をつくる」という技術面でのアプローチや、ビデオ撮影によって演奏のフィードバックを図るといった提言等、指導法の発展に結びつく有益なアイデアを得ることができた。さらに今回、受講生と授業者がいつもとは違った緊張感の中で集中した時間を共有できたことや、授業の在り方を意識的に考える機会になったことは、大きな収穫であった。